



平家女護持二段目切

鬼界の鳴孔段



謹シテ昭和五年ノ新春ヲ迎エマシタ事ヲ祝福致シ舛。愈々新文樂座モお  
盛ニ持テマシテ埃成致シ元旦ヨリ目出度初日ヲ開ケマシタルハ何共申シ  
様ナキ嬉シサデ御座イマス。此ノ郷土藝術ノ殿堂第壹回興行ニ何カ古淨  
瑠璃ノ内ヨリ皆様方ノ御耳新シキ物ヲトノ御進メニ依リマシテ何角ト考  
エマシタル處アタカモ本年ノ御勅題(海邊ノ巖)ニ因ミ平家女護嶋鬼界ケ  
嶋ノ段ヲ復活スル事ニ相成リマシタ

是レハ近松門左衛門翁六十七歳ノ作(今去二百二十三年前)享保四年八月十  
二日初日ニテ竹本座ニ書卸シ初代竹本政太夫師后ニ二代目義太夫ヲ襲名  
致サレ後年竹本播摩少椽藤原喜教ト受領セラレマシタ名人ガ床ニカケマ  
シテ以來安永元年八月(今去百五十九年前)全ジク竹本座ニ於テ初代竹本  
綱太夫師ガ語ラレ此時大々ノ好評デアリマシタ事ヲ高名集ト申ス小冊子  
ニ書イテ御座リマス。其ノ後初代竹本彌太夫師。及ビ。竹本磯太夫師此  
ノ御方ハ二代目竹本彌太夫ヲ相續セラル、夫レヨリ四代目竹本染太夫師  
五代目染太夫師。六代目染太夫師ノ語ラレシ後ハ永ラク中絶致シテ居リ  
マシタ處明治二十三年十月一日初日ニテ御靈文樂座ノ立春姫小松ノ中ニ

加エマシテ二代目竹本長尾太夫師ガ語ラレマシタ夫レカラ本年迄四十ヶ年モ打チ絶エテ居リマシタルヲ久方ぶりニテ新ラシキ文樂座ノ初舞臺ニヲコガマシクモ私シガ語リマスル事ニ相成リマシタ。サテ平家女護嶋ノ全段ノ内容ワト申シマスルト平重衡南都焼討ヨリノ凱旋ニ筆ヲ起シ清盛暴横ノ極「俊寛ノ妻あづまや」丹波少將成經ノ情人蟹ノ千鳥」ヲ虐殺セシたたりニテ熱病ニ掛リ悶死ノ事。鬼界ケ島流人ノ生活模様其ノ赦免歸路ノ狀。牛若女裝シテ常盤ノ館ニ入り込ミ共々心ヲ合セテ源氏一味ノ徒ヲ糾合スル事。宗清父子ノ苦節等ヲ叙シ文覺源氏ノ蜂起滅亡ノ經路ヲ夢ムト云フ條デアリマス

此ノ度上演ノ鬼界ケ島ノ段ハ全狂言ノ二段目ノ切テ俊寛鬼界ケ島ノ人間苦ヲ見セタ物デ流人生活ノ寂寥ニ蟹ノ千鳥ノ色氣ヲ加エタ處淨曲ノ妙味デアリマス  
即チ平家ヲ亡サントノ陰謀露見シテ清盛ノ爲メニ島ニ流人ノ身ト成ツタ成經。康頼。俊寛ノ三人ハ明ケクレ都ノ音信ヲ待チ詫ビテ淋シイ月日ヲ送ツテ居ル處エ都カラ京家ノ武士瀨ノ尾太郎兼安。丹左衛門尉元康ノ兩

人中宮御産ノ御祈禱ニ就イテ赦免狀ヲ携エテ島ニ船ヲ寄セタ、夫レニハ俊寛ノ名ガ洩レテ居タガ小松内府重盛ノ計ラヒテ俊寛モ赦免ト成ツテ嬉ビ勇ム然ルニ成經一人浮カヌ顔ヲシテ居ルハ島デ契リシ蟹ノ千鳥ト別レルノガ切ナイノデアル瀨ノ尾ガ千鳥ノ乗船ヲ拒ムノデ俊寛ハ怒リテ是ヲ斬ツタガツクト、思エバ都ニ歸ツタ迎一家離散シ最愛ノ妻あづまやモ清盛ノ爲ニ殺サレシ事ヲ聞キ浮世ニ望ミナキ身。我が身ニ代エテ千鳥ヲ成經ト共ニ都ニ遣リ自ラハ永シエニ島ノ流人トシテ殘ルト言フノガ此ノ段ノ内容デ御座イマス

尤モ此ノ頃良ク出版致サレマス各近松全集物之中ニハ此ノ平家女護島ハ書イテ御座イマスガ當度新築初開場紀念興行ニ不肖儀久方振リニテ上演致シマスルニ附茲ニ此ノ小本ヲ作製シ江湖之諸彦ニ御謁讀ヲ希ヒ以テ御指導ト御批判ヲ仰ギマシテ今後ノ參考ニ供シ度イト存ジマス

尙本文中薩摩言葉トモ申シマスカお國なまりガ處々ニ御座イマスノデ其ノ注釋ヲ加エテ置キマシタ宜敷御判讀願ヒマス

昭和五年初春

豊竹古鞞太夫





## 謠曲俊寛

鹿ヶ谷ノ陰謀破レ鬼界ヶ島ヘ流サレ居タル流人之中成経康頼二人ノミ赦免セラレ俊寛一人島ニ殘サレタル時ノ哀レ成ル様ヲ作レリ古別名ヲ(俊寛僧都)(鬼界ヶ島)(鬼海ヶ島)(硫黄ヶ島)ナド云ヘリ

孤島ニ沈淪セル俊寛ノ悲歎ト憔悴トヲ表トシ其裏面ニハ雄僧ノ氣慨時ニ其光ヲ放タントスル趣ナカル可ズ此兩面ヲ備ヘテ始メテ曲ノ精神ヲ得タルモノト言フベシ

### ○俊寛ハ

源大納言雅俊ノ孫法印寛雅ノ子僧都(僧正ニ次グ僧官)ニシテ法勝寺ノ執行タル大納言成親平氏ヲ倒サント謀タリシ頃俊寛成親ノ許ニ有シ鶴ノ前ト云フ上童ニ通ヒ女子ヲ儲ケタル事ナド有テ此謀ニ加ハリシ事源平盛衰記長門本平家物語ナドニ見ユ鬼界ヶ島ニ流サレシハ治承元年康頼成経赦サレシハ同二年俊寛一人殘リテ翌年三拾七歳ニテ此島ニ死ス

### ○丹波ノ少將成経ハ

藤原成親ノ子右近衛ノ少將ニシテ丹波ノ守タリシカバ丹波少將ト稱セ

ラル父大納言成親ガ源行綱平康頼僧西光等ト法勝寺ノ執行俊寛ガ鹿ケ谷ノ別荘ニ會シ平家ヲ滅サント謀リタル罪ニ座シ治承元年六月俊寛康頼ト共ニ硫黄ケ島ニ流サル赦免ノ時廿二

○平判官康頼

平頼季ノ子檢非違使尉タリシカバ平判官ト稱セリ硫黄ケ島ニ流サレシ時周防室積ニテ出家シ法名ヲバ性照ト云ヘリサレバ入道ト云フ

○鬼界ケ島ハ

薩摩ノ沖ニアル南嶋ノ稱名長門本平家物語ニ鬼界ハ十二島ナレバ口五嶋ハ日本ニ從ヘリ奥七嶋ハ未ダ我朝ニ從ハズト云ヘリ口五嶋ノ内丹波ノ少將ヲバ三ノトマリノ北硫黄ケ島ニ捨テ置キ康頼ヲバアコシキノ島俊寛ヲバ白石ガ島ニゾ捨置キケル (中略) セメテ一ツノ島ニモ捨テラレタラバ慰ム方モアルベキニ (中略) マシテ所々ノ思イイカニシテ一日片時モ日ヲ送ルベキト泣ケリ兎角シテ俊寛モ康頼モ少將ノマシケル硫黄ケ島ニタドリ着キタガイニ血涙ヲゾ流シケル云々

○硫黄ケ島ハ

神ヲ齋フトイ、カケタリ硫黄ケ島ハ鬼界ケ島ノ中ニ薩摩瀧ノ西南ノ沖ニアル小島也平家物語ニ島ニハ人稀ナリケリ自ラ人ハアレドモ衣裳ナケレバ此土ノ人ニモ似ズ言フ詞ヲモ聞キ知ラズ身ニハ頻ニ毛生ヒツ、色黒クシテ牛ノ如シ(中畧)島ノ中ニハ高キ山アリトコシナヘニ火燃ヘ硫黄ト云フモノ充チ滿テリカルガ故ニコソ硫黄ケ島トハ名附タレ云々

○中宮御産之御祈ハ

中宮トハ清盛ノ女高倉天皇ノ后建禮門院也安徳天皇生レサセ給フ時御産平安ノ御祈様々有シ事諸書ニ出ズ

○非常ノ大赦ハ

特典ヲ以テ囚人ノ罪科ヲ赦ス事、常、大、非常、ノ三種ニ別チ非常赦ハ大罪ノ者ヲモ赦スノ例也

○流人ハ

流罪ニ所セラレタル人古、近流、中流、遠流、ノ三種也

○配所ハ

罪人ノ流サレタル場所

○法勝寺ハ

俊寛ノ執行タリシ寺名舊跡山城愛宕郡岡崎村ニアリ

○彭祖七百歳ハ

此事大平記龍馬進奏三事ノ條ニ悉シ曾我物語ニハ慈童ト云シ  
仙人菊水迎統ビケルモ此ノ酒ナリ是ハ法華經普門品ノ二句ノ偈ヲ聞キ  
シ故ニ菊之下行水不死ノ藥ト成ケルヲ此仙人ハ用ヒケルトカ公ニモ是  
ヲウツシ重陽ノ宴トテ酒ニ菊ヲ入レテ用ユ

○重陽ハ

九月九日ノ節句

○長月ハ

陰曆九月ハ異稱赦免ノ使イノ此島ニ着キシハ九月ノ二十日頃ト平家物  
語ミユ

○竹葉トハ 酒ノ異名

○元是藥ノ水トハ

曾我物語ニ新酒百藥長トモ書ケリ云々

○醞酒ハ

美酒ヲ云フ此水モ如何デ美酒トナラザラントナリ

○山路谷水或ハ古ク(ヤマデ)(タニミツ)ト讀ミシニハ非ルカ

○藥ト菊水 藥ハ聞クト云フヲ菊ニ掛ク

○赦免狀ハ

特赦ノ免狀長門本平家物語ニ其文ヲ擧グ爲ニ中宮御産御祈ニ依レ被レ行ニ  
非常大赦ニ薩摩方鬼界島流人前左少將藤原朝臣成經稱平判官康賴入道  
可レ合ニ歸參之由所レ候也依レ仰執達如件

治承二年七月三日

○罪モ同ジ罪云々 長門本平家物語ノ成經歸路ノ事ヲ記セル條ニ

月モ同ジ月空モ同ジ空ノイカナレバ今宵ノ空ノテリマサルラントアル  
歌ノ詞ヲ借リタル成ベシ

○誓ヒノ綱云々

佛ノ衆生ヲ救ヒテ涅槃ノ彼岸ニ渡ラシメ給フ誓願ヲ綱ニ喩ヘシ語  
○今生ヨリノ冥途ハ 此世ナガラノ冥途

○卷物ハ 赦免狀ヲサス

○禮紙ハ 書狀ノ上包ノ白紙

○セン方波ハ セン方ナシヲ波ニ云イカク

○歸路ハ 歸京

右ハ謠曲俊寛之解題。謠方。梗概。辭解之内ヨリ近松門左衛門翁ノ作タル平家女護島二段目之切鬼界ケ島之段ニ有ル文章ノ所ダケヲ書出ス義太夫之此段ニハ赦免使ノ丹左衛門尉基康ノ外ニ瀬之尾太郎兼安ト云フ武士ト海士ノ千島ト云フ娘ヲ作り出シアル

○謠曲俊寛ニハ

ツレ 丹波ノ少將成經

ツレ 平判官康頼入道

シテ 僧都俊寛

ワキ 赦免使丹左衛門尉基康

右四名也

○たなつ物もなく (穀 稻之特稱御園ニ播キツ穀類ノ總稱)

○憔悴枯稿 (ヤセツカナル) (ヤセヲトロウ)

(靖獻遺言ニ)

漁父辭曰屈原既放游ニ於江潭行吟ニ澤畔ニ顔色憔悴形、容枯稿漁父見而問之曰子非三閭大夫、與何故至ニ於斯屈原曰舉レ世皆濁我獨清衆人皆醉我獨醒是以見放漁父曰聖人不レ凝滯於物而能與レ世レ推移世人皆濁何不<sub>下</sub>凝ニ其舖ニ其糟ニ而歎其醜<sub>上</sub>何故深思高舉自分放爲

(讀方)

漁父ノ辭ニ曰ク屈原既ニ放タレ江潭ニ遊ビ行ク澤畔ニ吟ズ顔色憔悴シ形容枯稿ス漁父見テ之ヲ問フテ曰ク子ハ三閭大夫ニ非ズヤ何ガ故ニ斯至ルト屈原曰ク世ヲ舉リテ皆濁リ我獨清メリ衆人皆醉ヒ我獨リ醒ム是ヲ以テ放タルト漁父曰ク聖人ハ物ニ凝滯セズシテ能ク世ト推移ス世人皆濁ラバ何ゾ其泥ヲ濁シテ其役ヲ揚ケザル衆人皆醉ハバ何ゾ其糟ヲ舖テ其醜ヲ歎ラザル何ガ故ニ深ク思イ高ク舉リ自ラ放タレシムルコトヲスルト

○九十九髮ツクモガミ（老嫗ノ白髮ノ江浦草ツクモ（水藻ノ名）ニ似タルヲ云フ語也）

古語伊勢

百年ニ一年足ラヌツクモ髮我ヲコフラシラムカゲニ見ユ

此歌ニ依リテ九十九ヲツクモト讀ム

○綴ツヅリサセテフ虫ノ音モ（其鳴聲恰モ衣ヲ綴リサセト云フ意ノ如ク聞ユルヨリ云フトゾ動物ノ名キリギリス今ノコホロギニ全ジ）

古今

秋風ニホコロビヌラシ藤袴綴リサセテフキリギリスナク

○今ハ胡狄ノ一足（胡狄ハ北狄ハびす即チ夷狄ノ八種ハびすノ一門一

族ト云フ事ハびす夷狄）

源平盛衰記八蘇武ノ事ノ條

昔籠ニ巖穴之洞ニ徒送ニ三春之愁歎ニ今放ニ稽田之畝ニ空向ニ胡狄之一足

設身留永朽ニ於胡國ニ前神還再仕ニ於漢

○沖津波チキツナミ（沖ヨリ來ル浪之事）

○磯山イソヤマ（磯邊ニアル山之事）

○濱千鳥ハムチドリ（濱邊ニイル千鳥之事）

○忘ラレム時シノベトゾ濱千鳥行ヘモ知ラヌ跡ヲトドムル

○白波ノ打出ノ濱ノ濱千鳥跡ヤタエヌルシルベナルナラム

○鶉衣ウズラコモ（ウズラキヌ、ウズラノコロモ、ウズラゴロモ、怪シクハエ

モナキキレギレヲ集メテ綴リタルヲ鶉衣ト云フ、苟ニ衣如縣衣ト有鶉

ノ體ノ短キ羽毛ニ被ハレタル様襪襪ニ似タルヨリ云フ）

○諸阿修羅道シヨアシュラドウ（佛教ノ語阿修羅界之事、平家物語ニ見ユ

○故在大海邊（出典不明智度論阿修羅生存ニ大海邊住）

○三惡（地獄餓鬼畜生）

○四趣（三惡ニ修羅ヲ加ヘテイフ）

○山田もらねど

（續古今女實僧都）

山田守る僧都の身こそ悲しけれあきはてぬれば問ふ人もなし

○搥馴衣シヲクニコロモ（搥ヲ燒ク人ノ着ル衣）

古語 須磨の海士の搥焼衣馴れぬれど戀という物はわすれかねつも

塩焼衣ヲ塩馴衣トかよわせり

○がさみ (蟹之一種)

○あまの逆手サカテ

(新勅撰俊成)

いかにせん海士の逆手を打返し恨みてもなを飽すもあるかな

○つげの小櫛ツグシもとるまもなく

(新古今業平)

芦の家の灘の塩焼暇なみつげの小櫛もさゝす來にけり

○玉かづら (かづらは蔓延してたへぬ物なるよりたへぬにかけて云ふ)

○汐じむ (朝氣ニ染ミテ濕フ物事ニナレシタシム)

○うらが様ヨロなめら (自分のよふな女自稱代名詞)

○歌連歌にべる (ぬめるの意か)

○むぞうか者 (可愛いもの)

○ほやくしやりめす (嬉しき形容)

○いもよ (妹よ)

○とせろ (こうせよ)

○かくせろ (あゝせよ)

○ぎやつて (御意有ツテノ義)

○りんによがつて (イトシガツテ)

○小しをらしげナ (ドコトナクシホラシイ事)

○綾羅錦繡リヨウキンシユ (アヤトウスモノ詩歌美文ヲヨクタル人ノ心)

○汐ノ干潟シホノヒキ去リテ潟ト成タル所)

伊勢の海の入江の草の汐干潟海士もほたるの玉はひろわじ

○瑠璃の玉の盃ニ (瑠璃楚語佛教語玉ノ類七寶ノ一色ハ種々有リト云フ特

ニ紺色成瑠璃るりいろの略)

○如清涼池ニ (涼しい清々しい靈池の如し)

○鼻入ハナめ (鼻入道ノ略)

○雲雀骨ヒナリボネ (瘦セ細リタル骨格ヲ云フ)

○御情ミナシも無足ムソクし (ムダニナル)

○天津鴈テンジンカガ (空ヲトブ鴈)

時を感して花も涙をそそぎ別と  
 恨みても鳥も心や動かせり。もとよ  
 りも此鳥の鬼界が鳥を聞くおれが。  
 鬼ある處も今せよりの冥途あり。  
 たまひいある鬼ありとの哀をどう  
 知りたらん天地や動け鬼神も感  
 ぢなきあるも人の哀あるものや。此鳥  
 の鳥獣もさうわれをさうやらん

讀ま前後ヲ略ス

へいけ によごのしま  
 平家女護嶋

二段目の切

もとよりも此鳥は鬼界が嶋と聞なれば  
をにあるところ このしま き かい しま きく  
 鬼有所にて今生の冥途なりたとひい  
なるをに この  
 か成鬼なりと此あはれなどかしらざら  
このしま とりけたもの  
 ん此嶋の鳥獸物もなくわ我をとふやら  
むかしがた しの  
 ん昔語るも忍ぶにも都に似たる物逆は  
そら つぎひ ばかりはな き ぐら まれ  
 空に月日のかげ斗花の木草も稀なれば

耕たがやうへし植うへん五つもののたなつ物ものもなく責せめて命いのち

をつなげとや嶺みねより硫黄いおうの燃もへづ出るを釣つり

人ひとの魚うをにかへ波なみのあらめやひかたの貝かい

見みるめにかゝる露つゆの身みは憔悴せうすい枯稿ここうの九つ

十九くも髮がみかた肩かたに木この葉はの綴つぎりさせてふ虫むしの音ね

も枯木かれきの杖つゑによるよろくよろくよと今いまは

都狄こてびの一足あしと詫わしも俊寛しゆんかんが身みにしら雪ゆき

のつもるを冬ふゆさゆるを夏風なつかせの氣色けしきを曆こよみ

にて春はるぞ秋あきぞと手てを折をれば凡日をよそひかづ數ねんは三年ねん

の事こととふ物ものは冲津波磯山嵐をぎつ なみいそやまおろしはまちごりなみだ濱はま千鳥ちどり涙なみだを

添そて古郷ふるさとへいつ廻めぐり行小車ゆくおぐるまのあだちの

鮒ふなの水みづをこふ憂目うげめも中なかくくに競苦くらべくるしき

身みの果はての命いのち待まつまぞ哀成あはれなり同おなじ思おもひに朽くち

果はてし鶉うづら衣ころもに苔深こげふかき岩いわのかけぢをつた

ひをりあづらふ有様ありさま 詞ハア我れもあのわれ

姿かや諸阿修羅道故在しよあ しゆら ぎうこ ざいだいかいへん 大海邊あく とも三惡あく

四超しゆは深山海づらしんざんうみに有と御經あり ござやうにとかれ

しが知しらず我餓鬼道われが きごうにや落をちけんと能々見よくよくみ

れば平判官康頼へいはんぐわんやすよりア、我も人もかくも衰おそろへ

果はてしかと心も騷濱邊こころ さはぐはまべの荻あしかさわけく

くる人は丹波少將成經ひと たんばのしよくなりつね 詞なふ少將殿しよくぎのな

ふ康頼やすよりこは俊寛しゆんかんか僧都そうづかと招まねき合歩寄あいあゆみより

友ともなふ人ひと迎むかは明あけても康頼やすより暮くれても少將しよく三

人の外ほかなき物ものを何迎なにむかか音信おとづれたへ絶山田やまたもら

ねど世よにあきし僧都そうづが身みこそ悲かなしけれ

と手てを取りかぬし泣なたもふ詫かこちは道理去ごうり さ

りながら康頼やすよりは此嶋このしまに熊野三所くまの さんしよを勸請かんじよ

し日参にっさんに暇いとまなし三人どもの友ともなひも此頃このごろ四

人に成たるを僧都は未御存じなきか何

四人に成りたるとは扱は又流人ばし有

つての事かイヤ左様ではなし少將殿こ

そ艶き海士の戀にむすぼれ妻を設給ひ

しといふより僧都莞笑と珍らしく配

所三とせが間人のうへにも我うへにも

戀と云字の開始笑ひ顔も是始殊更海

士人の戀とは大職冠行平も磯に見るめ

の汐馴衣濡始は何とく俊寛も古郷に

あづまやと云女房明暮思ひ慕へば夫婦

の中も戀同然語るも戀聞も戀聞たし

く語りたまへと責られて顔を赤むる

丹波少將三人互の身の上を包には有ぬ

共數ならぬ海士の茶船押出して戀と申

も恥はづかしながらなふかゝる邊國波嶋迄誰たが

踏分ふみわけし戀こいの道みちあの桐嶋きりしまの漁父りよふが娘千鳥むすめちどり

といふ女世をんなよの營いとなみの鹽衣しをころもくむ汲やくも燒それも夫は

まだ濱邊はまべの業わざそりや時ときぞと夕波ゆうなみに可愛かわい

や女の丸裸をなご腰まるはだかこしにうけ桶手をけてには鎌かま千尋ちひろ

の底そこの波間なみまを分わけて見みるめかゝるあかめ海あら

帶めあられもない裸身はだかみに鱧はもがぬら付鰯ぼらが

採こそぐるかざみがつめる餌ゑかと思おもふて小鯛こだい

が乳ちゅに喰付くいつくやら腰こしの一重ゑが波なみにひたれ

て肌はだゑも見みへすく壺つぼかど心得こころへたこ蛸へそめが臍

を窺うかがふらきぬしづみぬ浮世うきよ渡り人魚にんぎよの

泳をよぐもかくやらん沙干しほひになれば洲崎すさきの砂うな

の腰こしだけ跟きびすには蛤はまぐり踏太股ふみふともに蚶あかがいはさみゆび狭指

で鮑あはびおこせば爪つめは蠣かきがいはいのふたあ

まの逆手さかてを打休うちやすめつげの小櫛こぐしも取間とるまなく  
 螺なまこの尻しりのぐろくわげも縁ゑん有目あるめからは  
 玉たまかづらかゝる鳴しまへもいつの間まに結むすふ  
 の神かみの影向やうごうか馴なれそめなごみ今は埴生はにゆの  
 夫ふう婦ふ住夫すみを思おもふ眞實しんじつの情なさけ深ふかく哀あわれ知木しりこ  
 の葉はを集あつめぬ縫綴いつづる計手利はりてさ夜の寢醒ねざめは鹽なまりよ  
 じむ肌はだに引寄聲ひきよせこへこそはさつま訛世なまりよに睦むつ

まじ睦言むつごうらが様やうなめら歌連哥うたれんかにべ  
 る都人夢みやびゆめにも見みやしめすまい縁有ゑんばこ  
 そ抱だて寝ねてむぞうか者共ものどもおもしろやつて  
 たもりめすと思おもへば胸むねつぶしうほや  
 くしやりめす親をやもない身大事みだいじのせな  
 の友達康頼ともだちやすよりさま様さまは兄丈俊寛あにんじよしゆんかんさま様さまは爺ていさま様さまと  
 拜をがみたい娘むすめよ。いもよ。とせろ。かくせろ。と

ぎやつてりんによがつてくれめせかして  
 ほろと泣ないたる可愛かあいさ都人みやびとのごさんすよ  
 りりんによぎやつてくれめすが身みにし  
 み渡わたると語かたらるる僧都そうづきうい入り感かんにたへ  
 てきてくをもしろ あはれ  
 扱あはて面白あはふて哀あはでだてで殊勝しゆしようで可愛かはいひ  
 戀先こいまづ其君そのきみに見参けんざんいざ庵いをりへ参まいらふかいや  
 すなわち までどうくち どり  
 即すなわちあれ迄まで同道どうだい千鳥ちどりくと呼よばれてあいと

芦あしかき分わけ竹たけの擔おうちにめざし籠かごかたげた  
 ふりも小ことほらしげを見みめがよければ  
 身みに着きたるつづれも綾羅錦繡りやうらきんしうを恥はじぬ形  
 はあたら物ものなぜに蚤あまとは生うまれけん僧都そうづ  
 も會釋あしやくの挨拶あいさつ艶やさしい噂うはさう承けたまはつて感心かんしん康やす  
 頼よりはとく對面たいめんとな俊寛しゆんかんはけふ始はじめ親をやと  
 たのみたき この  
 頼度たのみたきとや此この三人しんるいごうせんべつは親類しんるい同然ごうぜん別べつしてけふ

より親子の約束我娘哀御免蒙り四人

つれみやこいりたんばのしよくなりつね

連で都入丹波少將成經の北の方と緋の

袴着るを待つ斗りエ、口惜い岩を穿土

を堀ても一滴の酒はなし盃なしめで

たいといふ詞が三三九度じやと云けれ

ばハア此賤しい蜚の身で緋の袴とは親

罰かぶる事都人に縁を結ぶが身の大慶

七百年生る仙人の薬の酒とは菊水の流

それをかたどり筒に詰たも此嶋の山

水酒ぞと思ふ心が酒此鮑貝のお盃戴

きけふから彌々親よ子よ爺様よ娘よと

むぞうか者とりんによぎやつてくれめ

せといへば各打笑ひ實尤と菊の酒

盛鮑はるりの玉の盃さいつさ、れつ

飲諷のめうたへ三人四人が身みのうへを硫黄いをうが嶋しま

も蓬萊ほうらいの嶋しまに譬たとへて汲共盡くめどもつきぬいづみの酒さけ

とぞ樂たのしける康賴沖やすよりをきを打詠うちながめハア漁船りようせん

共覺ともをぼへぬ大船漕たいせんこぎくるは心得こころへずアレあれ

よくといふ中うちに程ほどなく着岸京家ちやくがんけの武ぶ

士の印しるしを立汐たてしをの干瀉ひかたに船ふねつながせ兩使りよし

汀みざわに上あがつて松影まつかげに床几しやうぎ立させ流人丹波たんば

の少將平判官康賴しよしよはんがんやすよりやおはすると高たから

かに呼よはす聲夢共こへゆめどもあかず丹波少將是たんばのしよしよこれに

候俊寬康賴そうろしゆんかんやすよりと我先われさきにとふためき走はし

り二人が前まへにハ、はつくくと手てをつき

頭づをさげ蹲うづくまる瀨尾太郎せつをのたろうが首くびにかけた

る赦文取出ゆるしぶみどりいだし是々これくしやめん赦免おもむきはの趣いちよあ拜聽有

れと押をしひらき中宮御産ちゆうぐんごさんの祈いのりによつて

非常の大赦行はる鬼界が嶋の流人丹波

少將成經平判官康頼二人赦免有ル所急

ぎ歸洛せしむべきの條件のごとこと讀

も終らず二人ハ、はつとひれ伏ばイヤ

なふ俊寛は何迎讀落し給ふぞヤア瀬尾

程の者に讀落せしとは慮外至極二人の

外に名が有るかサコレ是見よと指出す

少將判官諸共にヤア是はふしぎと讀か

へしくりかへしもしやと禮紙を尋ても

僧都共俊寛共書たる文字のあらばこそ

入道殿の物忘れかそも筆者の誤りか同

じ罪同じ配所非常も同じ大赦の二人は

赦され我一人誓ひの網に洩果し菩薩の

大悲大慈にも分隔の有りけるかとくに

捨身しやしんし死ししたらば此悲かなしみは有あるまじきに

もしやこゑくなとながらへて淺あさましの命いのちや

と聲こゑもおなしまなず泣な給たまふ丹左衛門懷中たんざゑもんくわいちゆうの

一通出つうだしとつもく申聞まおしきかせんごもずれ共小松ごまつ

殿どのの仁心骨髄じんしんこつすいにしたらせんめし爲暫たらくは控ひか

へたり是聞これきかれよと聲こゑを上何あげなにくきかい鬼界かいが鳴しま

の流人俊寛僧都事小松しゆんかんそうづごとごまつの内府重盛公ないふしげもりこうの

憐愍れんみんによつて備前びぜんの國迄歸參くにまできさんすべきの

條能登じよのどノ守教經かみのりつねうけたまわ奉くだんつて件くだんのごとし何なに

三人共どもの御救おゆるしか中々なハアハアはあと

俊寛しゆんかんは眞砂まに額ひたいを摺入すりいレばいく三拜さんぱいなし

て嬉うれし泣なき少將夫婦平判官夢はんがんゆめではないか

誠まことかとおどよつろつまふこつ悦よろこびは猛火もうかにこ

げし餓鬼道がきどうの佛ほとけの甘露かんろにうるほにいて如よ

清涼地しよりよちどらたひしもかくやと思ひやら

れたりりよしこごは両使詞そろを揃へ最早鳴もはやしまよに用よもなし

仕合しやわせと風かせもよしいざ御乗船ごじよせんもつども尤よと四

人船ふねにのらんとす瀬尾千鳥せのをちどりを取とつて引退ひきのけ

ヤア見苦みぐるしい女おんなめ見送みおくりのやつならば

そこ立去たちされと睨ねめつけ付るイヤこのくるしからず此

少將しよしよが配所はいしよの中うチ厚恩かうをんの情なさけを受夫婦うけふうふと

成なり歸洛きらくせば同道どうどうと堅かたく申もうしかあせし女おんな

御兩人ごりよにんの了管りよけんを以もつて着船ちやくせんの津迄つうまでのせ乗のてた

べ子し々孫ゝ々迄そんくまでこのおん此恩わすは忘わすれ置おかじと手てをすつ

て佗わびたま及おもへば思おもひもよらずやかましい女おんな

め誰たれれか有あるアレ引ひきずり退のけよとひしめ

いたりハテ了管りよけんなければ力ちからなし此上このうへは

少將しよしよも此嶋このしまにとどまつて都みやこへは歸かへるま

じサア しゆんかんやすよりふね 俊寛康頼船にの乗られよいやく

一人いちにんのこ残し本意ほんいでなし流人いっちは一致われ我々も

歸かへるまじと三人はまへ濱邊にどろと座ざを組思くみおも

ひ定めさだし其顔色そのがんしよくたんざ丹左衛門心有る侍さむらい

にて是瀨尾殿これせのをごのかやらにては君御大願きみごたいがんの

妨さまたげおんな女を船ふねには乗のせず共とも一日二日も逗ど

留りうしとつくと宥得心なだめどくしんさせ皆々心みなくこころよくて

こそ御祈禱ごきぎとうならめといひも切きらせずヤ

アそりや役人やくにんの我儘わがま船路關所ふなじせきしよの通り切きつ

手二人てと有ある二の字じの上うへに能登殿のぞごのが一

点てんくあへて三人とせられしさへ私成わたくし

るに四人とはどなたの赦ゆるし所詮しよせん六はら

の御館おんやかたへ渡わたす迄までは我々われが預あづかり乗のらぬとて迎

乗のせまいか俊寛しゆんかんが女房によぼうは清盛公きよもりこうの御意ごいを

そむ くびう  
 背き首討たれた有王が狼籍囚人同然の  
 ぼうす ざうしきごもろうどうごも ともふなそこ をしこみうご  
 坊主雜式共郎等共三人共船底に押込動  
 かすな 承 はると疋夫共千鳥を突退三  
 うけたま ひつぶごも ちどり つぎのけ  
 人の小腕取て引立く 獵人の餌籃に小  
 こがいなとつ ひつたてく かりうご ぶご こ  
 鳥をつむるがごとく捻付くきびしく  
 ねじつけ  
 まも せのを げじ ふねだ の たま さ  
 守る瀬尾が下知船出せく 乗り給へ左  
 る もんどのただ わたくし よう そろう  
 衛門殿但し御使の外私 の用はし候か

と理屈ばれば力なく同じく船に乘移る  
 ちから おな ふね のりうつ  
 ふ便や濱邊に只ひとり友なし千鳥泣わ  
 びん はまべ たゞ とも ち どりなき  
 めき武士はもの、哀れ知るといふは偽り  
 もののふ あわ し いっわ  
 よそら言よ鬼界が嶋に鬼はなく鬼は都  
 ごと きかい しま をに をに みやこ  
 に有りけるぞや馴初し其日より御免の  
 なれそめ そのひ ごめん  
 便聞せてたべと月日を拜龍神に願立  
 たよりきか つきひ おがみりうじん ぐわんたて  
 いのり つれ みやこ ぶ ようゑいぐわ のぞみ みの  
 祈しは連て都で榮耀榮花の望でなし簀

虫むしのよう様なすがた姿をもと元のはな花のすがた姿にしてせめて

一夜や添そいね寝しておなご女にうま生れためいもん名聞とこれ是一つ

のたの樂たのしみおにぞやきエ、おなごむごいおに鬼よき鬼神じんよおなご女

一人ひと乗のせたとてかる迎ふね輕いおも舟がおも重らひとびとふかひとびと人々の

歎なげきを見るみめなはないきか聞みくも耳はも持もたぬかか

乗のてたのせべこへなあふあ乗あおれあとあ聲あをあ上あ打あ招あきあ足あ

摺すりしてふしまろは臥ひ轉ひびひ人は目はもな恥なずな歎なしがあ蜚あの

身みなればり一り里りやり二り里りのう海みこはいとはお思も

あごねも共は八つ百び里やく九やく百やく里りがお游よもす水す練いもり叶かなねわ

ばこ此の岩いわにかしら頭うをち打あ當て打う碎ちきだ今いま死しぬぬるし少し將し

様さま名な殘ご惜りいおさらしばねやん念ぶ佛つ申もむうぞすらか者もの

りいんにわよなぎなやつなてくれめせとなくく

岩いわ根ねにたち立よ寄ればまやてれ待々しとゆ俊ん寛かんよろほぼひ

くふ艇なをば漸た轉らびま走は寄しりりアふ、ねコレふ船ねにふ

の乗せて京へやる今のを聞たか我妻は入  
 道殿の氣に違ふて切れしとや三世の契  
 りの女房死せ何樂しみに我獨り京の月  
 花見たふもなし二度の歎を見せんより  
 我を鳴に残しかわりにおこことが乗てた  
 べ時には關所三人の切手にも相違なく  
 又お使にも誤りなし世に便なき俊寛我

を佛になすと思ひ捨置て船にのれく  
 となくく手を取引立く御両使偏に  
 頼存る此女乗てたべとよろぼひ寄ば  
 瀬尾太郎大きに怒り飛でおりヤア梟入  
 め左様に自由に成ならば赦文もお使も  
 詮なし女は迎も叶はぬらぬめ乗といが  
 みか、ればそれはあまり了管なしとか

くお慈悲じひと欺たまし寄りよ瀬尾せのをが指さしたる腰刀こしかたな  
 抜ぬいて取とつたる稻妻いなづまや弓手ゆんでの肩先かたさき八寸斗ばかり  
きりこん切込ぬいだりうんとぬいのれ共遠ともの瀬尾せのを指さしぞへ  
 抜ぬいて起直をきなをり打うつてかゝるもひよろやなぎく柳  
そうづ僧都かは枯木かれきのいざり松まつり両方よほう氣力きり渚よくなぎさの砂すな  
 原踏はらふん込踏こみふみぬき息切いききれ聲こゑを力ちからにて爰こゝをせ  
 んといどみあふ船中せんちゆう騒さわげば丹左衛門たんざゑ門もん舳

板いに上のぼり御帳面ごちやうめんの流人るじんと上使じよしとの喧嘩けんか  
 落居しゆびの首尾みとびを見届みとけて言上ごんじよする下人げ成な  
 りとも助すけ太刀たちすな脇わきより少すこしも構かもふな  
 と眼まなこもふらず見分けんぶんす千鳥ちどり絶兼竹杖たねたけづゑふつ  
うちて打うちかくる僧都そうづ聲こゑをかけヤアコリヤよ寄よる  
 なく杖つゑでも出だせば相手あいての中科うちどがは遁のがれ  
さしでぬ指出さしでたらば恨うらむぞといかれは千鳥ちどりもせ

んかたなく心斗りに身をもんだり血ま  
 ぶれの手負とらへにつかれし瘦法師  
 はつしと打てばたちくく刀につら  
 れ手はぶらく組はくんでもしめぬば  
 左右へひよろりと放れ砂にむせんで片  
 息の兩方危く見へけるが瀬尾が心はら  
 へ見ぬ驚擱かゝるを俊寛が雲雀骨には

つたと蹴られかつばと伏ばはい寄つて  
 馬乗にどろど乗たる刀とどめをさゝん  
 とふり上る船中丹左衛門勝負は急度  
 見届けたとどめをさせば僧都の誤り科  
 重なるとどめさす事無用くテ科重  
 なつたる俊寛嶋に其儘捨置れよいや  
 く御邊を嶋に残しては小松殿能登殿

の御情も無足し御意を背く使の越度殊  
おなさけ 無足 御意 背く 使の越度 殊  
 に三人の數不足しては關所の違論叶ひ  
三人の數 不足 關所の違論 叶ひ  
 がたしと呼はつたるされぞく康頼少  
がたし 呼はつたる されぞく 康頼 少  
 將に此女をのすれぞ人數にも不足なく  
將に 此女をのすれぞ 人數にも 不足なく  
 關所の違論なき所小松殿能登殿の情に  
關所の違論 なき所 小松殿能登殿の情に  
 て昔の科は赦され歸洛に及ぶ俊寛が上  
昔の科は 赦され 歸洛に 及ぶ 俊寛が 上  
 使を切たる科によつて改めて今鬼界が  
使を切たる科によつて 改めて 今鬼界が

嶋の流人とまれぞ上御慈悲の筋も立お  
嶋の流人とまれぞ 上御慈悲の筋も 立お  
 使の越度聊ふしと始終を我一心に思  
使の越度 聊ふしと 始終を 我一心に 思  
 ひ定めしとどめの刀瀬尾請取れ恨の刀  
ひ定めしとどめの 刀瀬尾請取れ 恨の刀  
 三刀四刀しゝぎる引切首押切て立上れ  
三刀四刀しゝぎる 引切首押切て 立上れ  
 船中あつと感涙に少將も康頼も手を  
船中あつと 感涙に 少將も 康頼も 手を  
 合たる斗にて物をも云ず泣居たり見ろ  
合たる斗にて 物をも 云ず 泣居たり 見ろ  
 に付聞に付千鳥一人がやろ方ふさ夫婦  
に付聞に付 千鳥一人が やろ方 ふさ夫婦

は來世有物よわしが未練で思ひ切のま

い故嶋の憂目を人にかけのめく船よ

乗れらか皆様さらぞと立歸る縋りとど

めてアココレ我此嶋にとどまれぞ五穀ふ

離し餓鬼道ふ今現在の修羅道硫黄の燃

ろは地獄道三惡道を此世で果し後生を

助てくれぬか俊寛が乗は弘誓の船浮世

の船には望まじサア乗てくれ早乗と袖

を引立手を引立漸に抱乗けれを詮方

波に船人は纜といて漕出す少將夫婦

康頼も名殘惜やさらぞやといふより外

は涙みて船よりは扇を上陸は手を上

て互に未來でくと呼はる聲も出船

に追手の風の心まくと見送るかげも嶋が



大阪市西成區粉濱中之町

四丁目百參拾六番地

豊竹古靱太夫事

金杉彌太郎

電話住吉參壹四五番

島内廣田八千堂印行

